

言語学、生成文法におけるパラメーターと原理の理論では、個々の自然言語の多様性は普遍的なパラメーター（スイッチのようなもの）の設定によって決まるとされている。この理論によると、言語獲得のプロセスにおいて子供は個別言語のインプットをもとにそれぞれのパラメーターを設定している。例えば、英語を獲得中の子供は、wh 句が文のはじめに移動している文を一定の量インプットとして得ることで、wh パラメーター（wh 句が移動するかしないかというスイッチ）を正の値（[+wh]）に設定するが、日本語獲得中の子供はインプットとして常に wh 句が元位置に現れる文を得るため、当該パラメーターを負の値（[-wh]）に設定するということになる。本研究では、このようなパラメーターの一つとされる、Degree Abstraction Parameter (DAP) の設定の証拠を探った。DAP は、特に形式意味論の分野でその存在が主張されており、Degree Clausal Comparatives (DCC, e.g. This table is taller than that door is wide) や Measure Phrase (MP, e.g. This table is 1 meter tall) の意味の派生に共通してみられる degree abstraction (程度変数の抽出) という操作が可能かどうか、についてのパラメーターである。これまでに、多言語間のデータ分析を通して、DAP は活発に議論され、DCC を持つ言語はすべて必ず MP を持つことが分かっている。このことから、子供の言語獲得において予測されるのは、[+DAP] (DAP に対する正の値の設定) は、DCC と MP の獲得において、前提条件となるということである。すなわち、獲得の途中段階の子供の DCC と MP の理解度の間には相関性があることが予測される、i.e. [+DAP] の設定が終わった DCC と MP 両方が理解できるグループと、まだ設定の終わっていない、どちらもできないグループに分かれる。本研究では、モダリティ間選好注視法 (Intermodal Preferential Looking; IPL) を用いて、27 人の英語母語話者の 3-6 歳児を対象に実験を行い、DCC、MP それぞれの理解度を測定し、相関性を調べた。IPL は、認知発達研究によく使われるもので、一方のモダリティ (音声) で与えられた刺激とマッチするものを別のモダリティ (画像) で選択できるかを調べる方法である。被験者の子供は、文 (音声) を聞き、二つの並べられた画像 (うち一つが音声とマッチするもの) を見る。被験者がマッチした方を見た割合 (Match %) が長かった場合、あるいはマッチした方を見るまでにかかった時間 (Latency) が短かった場合、この文を理解したと考えられる。実験結果は、被験者の目の動きを録画したビデオをコーディングし注視時間を分析することによって得られた。分析の結果、3-4 歳のグループ (13 人) の Match%/Latency について、相関性は見られなかったが、5-6 歳のグループ (14 人) の Latency について若干の相関性が見られた ($r^2=0.2857$, $t(12)=2.19$, two-tailed $p=.049008^*$, by Pearson's Linear Correlation)。この結果は、形式意味論で議論されてきた理論上のパラメーターである DAP が、DCC と MP の獲得において実際に存在し、その設定の度合いが二つの構文の獲得度合いに影響を与えていることを示唆する。